

生成文法理論にもとづく現代中国語の 包括的な記述文法書

何元健著／山口直人訳
現代中国語生成文法



B5判 714頁
好文出版
[本体 6,000円 + 税]

藤井 友比呂

『現代中国語生成文法』（好文出版、二〇一八年）は、何元健

（Yuanjian He）元マカオ大学教授が執筆した『現代汉语生成语法』（北京大学出版社、二〇一一年）を、山口直人大東文化大学教授が邦訳したものである。生成文法と呼ばれる言語理論の枠組みを用いた現代中国語の包括的な記述文法書（中国語の言語現象を母語話者の言語直感に基づいて記述したもの）と言つてよい。

生成文法についてご存知の読者は、米国の言語学者ノーム・チョムスキーによって創始された「英文法の」学派という印象があるかもしれない。実際は、生成文法は中国語や日本語はもちろん他の様々な言語に適用されており、さらには生成文法の枠組みを分析基盤として採用することで異なる言語の比較が可能になるため、中英あるいは中日を比較した論文に

国際学術雑誌で出会うことも珍しくない。

早速本書の各章の紹介に移るが、この七〇〇ページを超える大著の紹介は紙数の関係上選択的にならざるを得ない。しかしそれでもなお、本書の包括性を伝えるためにできる限りデータに触れるように努めたい。

まず本書第一章、第二章は、文法理論の構築がどういうことであるかを説明し、文法理論を構成する部門と原理を導入する。その中では生成文法の特徴がいくつか挙げられているが、ここで形式化という条件をとりあげて理論の性格を素描することを試みたい。形式化とは言い換えれば、文の文法性や非文法性が理論（仮定の集まり）から演繹的に（論理的に）導かれなければならないということである。例えば、第四章にある類別詞と形容詞の語順の制約を例にして見てみよう。

「一条大狗」(一匹の大きい犬)は文法的であるが、「*大一条狗」はそうではない(*は当該の句や文が母語話者にとって非文法的であることを示す)。この対比を説明するために、理論は(i) 類別詞は名詞句を従えて量詞句を形成すること、(ii) 形容詞は名詞句内に現れなければならないこと、(iii) 「大」は形容詞であり、「条」は類別詞であることを仮定する。左の品詞ラベル付きカッコ表示から分かるように、「大」が「一条」に先行すると(ii)の条件が破られる(形容詞が名詞句の外にならざるを得ないことに注意)。これが上述の語順が不可能なことの説明の概要となる。

*大「^{量詞句}一条^{名詞句}狗」

このように生成文法は、文や句の適格性の条件を可能な限り明示的に規定することを自らに課すのである。

第三章～第五章は名詞句関連の章である。第四章「名詞句と量詞句」は上で既に触れたので、第三章と第五章に触れる。第三章「辞書」は、(句ではなく)語としての名詞の形成を取り上げる。例えば、「矮子」(背の低い人)、「电子」(電子)に見られる「子」は、形容詞や名詞から新しい語を作る接辞である。第五章「限定詞句」では、名詞の指示対象が問題にされている。限定詞とは英語の冠詞 *the* などである。中国語のような定冠詞を持たないように見える言語でこの限定詞分析

を当てはめるべきかどうかについては論争があるが、本書は中国語には、音声をもたないので何もないように見えるが、(ゼロ)限定詞が存在しているという立場をとる。

第六章は名詞相当句以外の様々な句を扱う(カッコ内は例)。形容詞句(「很红」(とても赤い)、副詞句(「仔細」(詳しく)、前置詞句(「在北京」(北京で)、数量詞句(「三个人」(三人)、助詞句(「高高的」(高い)、接続詞句(「包子」和「馒头」(パオズとマントウ))が考察されている。

第七章から第九章では動詞周辺の構造を詳細に吟味する。第七章は、動詞語幹と屈折的要素からなる複合体を主に取り上げる(「笑了」(笑った)などのアスペクト形式、「老师要不去上海?」(先生は上海に行かなければなりませんか?)などの「不」を伴う疑問形式等)。第八章では種々の動詞の項構造と称される性質に、第九章では種々の結果構文の分析に焦点を当てる。技術的前提が関わってくるため詳しく立ち入る余裕がないが、分析の雰囲気を得るために、自動詞に二種類あるといういわゆる「非対格仮説」をとりあげよう。「张三笑了」(張三は笑った)と「张三逃了」(張三は逃げた)は一見同じ形をしているが、倒置可能性に差が出てくる。「*笑了张三」は不可能であるのに対し、「逃了张三」は可能だという。「笑」の主語は主語の典型である「動作主」であるのにたいし、「逃」

の主語は、詳細は本書に譲らなければならないが、ある意味で目的語に近い「対象」であると分析し、倒置可能性の対比を捉えようとする。

第十章は、動詞句を超えた、節レベルの諸現象を検討する。前半で陳述、質問、命令という主文の文機能に関わる現象を扱い、後半で節が他のより大きい節の一部になる現象（埋め込み）を吟味している。文機能については補文標識と呼ばれる要素が重要である。中国語は一部日本語と似ていて、陳述の機能をもつ文「妈妈要去超市」へお母さんはスーパーに行かなければなりません」に疑問の補文標識「吗」を付加すると疑問の機能をもつ文となる。埋め込みについては、文が主文の主語や目的語となるケース（「张三当领导」不合适）（張三が指導者になることはふさわしくない）は埋め込み主語の例）、また関係節や同格節のように名詞を修飾するケースが検討される。第十一章と第十二章では、様々な構文が扱われている。「把」や「被」が関わる態交替現象（「张三把他骗了」張三は彼をだました）、「有」で導かれる存在文（「有客人来了」あるお客が来た）などを第十一章で扱い、焦点構文（「张三戴着眼镜」張三は何をかけているかと言え）メガネをかけているのだ）、主題構文（「这种事情呀，他不屑做」こういうことはね、彼はやろうとしない）等の構文を第十二章で扱う。

第十三章で扱われている疑問文は、恐らくもつともよく知られた中国語のトピックの一つであろう。八〇年代前半から、中国語や日本語の疑問語が（ヨーロッパの言語と異なり）文頭で発音される必要があるという性質（「张三去哪儿呢」張三はどこに行きますか）の研究が深化し、言語理論全般に大きなインパクトを与えいわゆる統率束縛理論（GB理論）の成立を導いた。本章はさらに詳細な疑問文の低位分類も提案しており（「吗」、「吧」、「是……还是……」を伴う諸形式）、この細やかな記述は、母語話者を読者に想定した研究書ならではのものである。

最終章である第十四章「論理形式」は、量化詞や代名詞類の解釈を取り上げて、文法と意味の関係を論じている。ここでは部分否定解釈の例を見て、論理形式の「感じ」に触れるだけで十分であろう。「所有发光的都不是金子」は（光るもの必ずしも金ならず）という部分否定の読みだけをもち、（全ての光るものは金でない）という全部否定の意味はもたない。このような意味的性質を扱う部門が論理形式である。

急ぎ足で全十四章を概観した。上述したように、本書の大きな特長の一つはその包括性及びデータの豊かさである。過去の中国語生成文法研究書の邦訳に『中国語変形文法研究』（湯廷池著、松村文芳訳、白帝社、一九八七年）がある。原著は

一九七七年に台湾で出版されていて、精緻な拡大標準理論の分析を示した良書であるが、データの範囲という点で両書の目次を比べると、この四〇年でいかに中国語の研究が進展したかが分かる。言語学者は通常、他の科学分野でもそうであるように「狭い」領域を「深く」研究する。一方で、ある言語の特定の文法事項を扱うとき、その言語の文法の他の性質に対する深い理解は欠かせない。このため本書のような包括的な文法書は言語学者にとって非常に有益であることは明らかであるが、他方で、普段は「狭い」領域の「深い」研究に従事しているため、仕上げるのが非常に難しい高度な仕事であるといえる。

さらに本書の邦訳書としての貢献も見逃せない。本書の翻訳は、中国語の高い読解能力をもつていながら中国語文法と生成文法の技術的側面に通じた研究者にしかできない仕事である。おかげで（私のような日本語や英語を研究対象にすることが多い）中国語が全く読めない者にも中国語で出版された研究書がアクセス可能となった。原著が読者に中国語母語話者を想定しているため、英語で出版されている記述文法書と比べると、本書には母語話者読者と対峙するときのある種の臨場感がある。

本書の出版についてもう一つ注目したことは、原著の出版

地である。原著は北京で出版されている。過去においては、中国本土では「チョムスキー理論にもとづいた研究は、地方の外国語学院とか、英語の先生の一部にしかみられず、中央の主要な言語学誌に自由に現れるようになるには、まだかなりの時間がかかるのではないかと思われる」状況があったという（今井邦彦編『チョムスキー小辞典』大修館書店、一九八六年）。原著が二〇一三年に版を重ねているという事実を踏まえると、状況はかなり変わってきたと推察され、生成文法研究の地域的広がりがうかがわれる。実際に東アジア言語の生成文法研究を多く掲載する国際誌 *Journal of East Asian Linguistics* のここ数年の巻を見ると、中国本土発の研究は急激に増えてきている。

最後に、中国語生成文法研究の地域的な広がりという点で言えば、本訳書の出版を経て、ここ日本においても、生成文法家ではない中国語研究者と中国語から遠かった生成文法家の距離が今後縮まっていくことが一層期待されるところである。

（ふじい・ともひろ 横浜国立大学大学院環境情報研究院）